

# 伝わるからだの探求④

——ゼロ弾きのゴーストを模範的に色読して——

釋 一 祐

易経に「地雷復」という言葉があります。大地に雷がとどろき慶事が始まる。自然現象が齋す縁起論です。始まるならば「生」とか「始」とすべきですが、「復」とあるのは、その陰行陰徳が遙か昔から反復されてきたことを教える為であります。

世界中で大流行しはじめた「マインドフルネス」は「瞑想」「禪」を元とした治療法です。人類は細菌感染症からはほぼ逃れ、今は免疫性疾患が課題です。この最有効治療として、ハーバード大学が出した答えが「マインドフルネス」でした。明治二十六年シカゴ万博にて開かれた、はじめての「万国宗教会議」。インドのヴィヴェーカーナンダと、日本の釈宗演が紹介した仏教の禪、ヒンズー教の瞑想は西洋の心を大きく揺さぶります。日本総監督は岡倉天心でした。ベトナム戦争中、米軍兵士は休暇中に仏教寺院へ入り僧堂生活をはじめ、アジア各地で仏教、儒教、道教を学びます。「教法流布の先後」の判断力をもってどう受け止めるべきなのでしょう。これらが野狐禪であるか止観業か？ その鑑定人が求められています。

地球は、まず植物により酸素濃度を上げ動物を生み、酸素濃度が低下すると巨大隕石を引き寄せ、ユカタンインパクトを起こし、十五年間の太陽隠れ（赤道下でマイナス十五度）をへて、環境を調べてまいりました。今でも、地球は年間約十万吨づつ質量が増加しているにもかかわらず、自転公転の速度や太陽との距離を保っています。

ヘルマンヘッセは渡し守にこう語らせています「私はこの川から学んだのです。すべてのものは帰り来るといふことを」と。今やこの論理（散逸構造論）はノーベル賞が認めるところです。

中国の砂漠に、夏だけ出現する川があります。陽の季節に齎される陰の恵み。亜熱帯の雨季と乾季。日本は四季と土用があり、山川草木彩り豊かなる由縁です。

中国では天地自然の流れを物理科学的に観察し気学として陰陽五行十干十二支に分科し、水流気流の観察を深めて天地一致を理解してゆきます。昼間は天に陽の力、大地は陰の力、夜は天に陰の力、地に陽の力。陽に対しては陰、陰に対しては陽、自然は強さに強さをぶつけません。

狩猟採集から農耕備蓄へと文明が転換しはじめたのは約一万年。狩猟採集時代は、身体能力の高さ、敵と毒を見つめる力が生存を支えました。相手の間違い探しと打ち負かしの能力です。それが農耕備蓄主流になると、自然現象の予見が優れた人材の資質となり、一方では貨幣を産み出します。一粒を半年で茶碗一杯にする、自然の圧倒的贈与、救い、一即多の法則に魅せられ、天地自然に倣う精神性、悦びと楽しみ、誉め励ます共感力の高さへと変化していきます。呪術と宗教のあわいです。

はじめ神への捧げものだった動物の血と肉は穀物へと替わり、やがて自他の関係性を信じ自らを捧げる菩薩が登場します。

昨今、心理学は六度・四無量心・三乗・一乗の教えを実用し始めています。心理学は、ヘルニズムにより運ばれた西洋における唯識的成果であり、キリスト教やユダヤ教の成立に仏教化があつたことは、もはや疑う余地のない今日であります。

アレキサンダーが西北インドを征服したのは、お釈迦様御入滅後約一〇〇〜二〇〇年。コーランに於けるイスカンドル、ヒンズー教のスカンダです。「大王はアジアの国土を征服したが、思想は征服された」と伝えられています。

このアレキサンダーの心を支配したアジアの「寛容の精神」はその後、民主主義ムーブメントを起こします。

アレキサンダー没後、約五十年（がアシヨカ王の時代、そして約三〇〇年後にイエスキリストが誕生します。紀元前の数十年間がシーザーの時代です。イエス様は、仏教の影響を最も受け、熱烈に救世主誕生を待ち望んだユダヤ教エッセネ派の出身です。

アレキサンダー自身も仏教インパクトを心に刻みました。また東洋の民衆もアレキサンダーインパクトを皆で共有しました。「あの様な大王の軍勢に国を蹂躪されたら、いくら自分個人のさいわい（成仏）を追求しても、埒が明かない」、これによりさいわいの定義が個人から集団、社会へと深化し、修行の在り方の変革を迫られます。

お釈迦様がお覚りになったところ、孔子様は、気学をふくむ、東洋の自然科学を纏め上げます。その後、仏教はこれを思想的な下地として漢訳され、そのまま日本へ伝わります。

ギリシャ神のトップ、ゼウスの姉にしてその娘を産んだデーメーテルと娘ペルセポネの地母神物語は鬼子母尊神様や七面大明神、伊邪那美命を想起します。多宝如来、地涌の菩薩、根の国↓国つ神↓地祇↓大黒さま↓日蓮聖人、当門下は大地との深き縁があります。地母神は寛容と柔順のシンボル、ま



さに千縁の象徴です。

マタイの福音書に「柔和な人達はさいわいである。彼らは大地の力を受け継ぐであろう」とあります。

陀羅尼品の呪文はダーラニーというよりマントラ、毘沙門天の呪文は地母神の力を高める讃文とも読めます。

今、禅が宗教の枠を越えコモディティ化されました。この先往きは個人から集団、社会、国家の健康へと向上するのでしょうか。世界一の大王アレキサンダーの心を掴んだ仏教と、世界共通の地母神に倣う寛容の精神「千縁運動」展開を願います。

宮沢賢治作品群には「寛容なる精神を育む」超課題（演劇用語で作家の意図）が籠められています。多く舞台化され俳優のレッスンとして親しまれており、聖霊が宿ると崇拜され、能楽にもなっています。

特に声に出し、からだで動いて役を生きる領域に入ると、それは仮想体験とはいい難いほどの感化力をもちます。始めに訪れる三毛猫は、ゴーシュのトマトを穫ってきて「お土産です」といい、弾いてみなさい聴いてあげるからといいます。その言い草に怒って、ネコがいやがる曲を弾いて腹いせをします。

次にカッコウがやってきて教えを請うくせに、自分の言分ばかりを主張します。しかしその熱心さにほだされて随分上達します。

次はとつてもおらかな狸の子がやってきます。ゴーシュは誉められその気になり、リズムを取る練習をはじめます。心が躍る様なその子狸のリズムにゴーシュは愉しく弾きます。そしてそれとなく間違いを正す子狸の指摘も心安く受け容れてしまおう。

最後は野鼠の親子です。ゴーシュのセロの響きは按摩のようで病気が治ると励まされゴーシュは自分の存在の意味を感じます。

指導者に必要な資質「寛容さ柔らかさを伴う誉め励ます力」の重要性になぞらえ、小中高の歩み三乗が文脈として

あります。

賢治文学の特徴に「逆擬人法」があります。一見動物の擬人化と観がちですが、人間が動物に共感し同機します。主体が動物、客体が人です。見失ってしまったものを非社会的動物によって気付かされる。「夕鶴」なども同種の物語。あわいのもつ更生力です。

光とは動く一本の線で、光のベクトル上に自分が居合わせてはじめて光を受ける事が出来ます。宗教は天地自然、存在するすべてを逆擬人化する。信仰はその天地自然が放射する光に照らされ、自分がどう映えているのか、如何なる存在とされているのか、天地自然を主体に置き、それに対し自分は客体的立場に積極的に立ち、伝わってくるからだに柔軟に随う生活。昨今では科学もこの宗教的方法論を採用し始めています。戒定慧を超え「信」の領域を捉え始めています。

「仏教は強引な力を持ってではなく対話をもって伝道された類例のない宗教」とは西側の評価です。近代は宗教の力が衰え、国が力を増長します。正しいとか慈悲深い人間性等ではなく、統制巧みな人種や国家が権力を持つ時代。しかしその国家も絶対的なものでなくなり、今や地球上の何処で何が起きてても、それがすぐにすべての国々の存亡、さらに我々一人ひとりの生活に直接影響がおよびます。数十年前までは、乱暴で野蛮な支配者によって社会が崩壊しても、その力の及ばない地域からの支援によって復興ができました。ところが世界が一つになってきた今、どこかで何か起きると、世界中にたちまちその影響が及んでしまう。そして破壊してしまったらもう取り返しがつかないという危険があります。後戻り出来ない地点、シンギュラーポイントを越えたのです。

「異質的なものに対する好意的関心」が個人及び組織の必須条件です。自分とは違う考え・信仰・習慣・行動・思想・主張に対する、お釈迦様が徹底して行なわれた寛容宥和の姿勢に注目が集まっています。

気学では「二黒欠けは地獄欠け」といわれ、もつとも恐ろしい事態とされ、寛容と柔順が欠けた社会を地獄の環境

と忌み嫌いました。二黒は大地を担当しています。寛容さを失い排他的独善性に大衆傾向が傾いた現代への対応策を気学は明確に示しています。そして、先祖供養やお墓や遺骨と自分との関係性が、自分の未来と対極で繋がっている事も示しております。マニユアル的に活用する危険性は歴史が警告するところですが、その奥にある論理構造や思想性からは明るい展望が開けます。この気学が二度目の東洋インパクト。十七世紀ころ、当事者はハイデガーやヘーゲル等の哲人達でした。

人間は意味もなく生存してはいけないのでしょうか？それとも意味は周りが見出すもの？意味が先か、生存が先か。穢れや悪を徹底して嫌い排除するのが仏教の精神ならば合掌という姿は生まれなかつたはずです。戦後最悪と報じられた相模原の事件を想いこれを考えます。リオオリンピックのテーマは「寛容」でした。

いま、我々人類は温暖化シンギュラーポイントを越え、日本文化喪失の歯車が廻り始めてしまいました。この人類生存の危機を回避する科学的方法は、気体炭素の固形化です。自然界に委ねるならば、善神捨国？闇と極寒の十五年。神話が伝える天の岩戸隠れなのでしょう。再び太陽の恵みを齎したのは悦びの声、神を称える美しい言挙げでした。仏教および宗教の立場からはどんな方法論を発信できるのでしょうか。

経済学の父アダムスミスが行き着いたファーストエコノミクスは「保身窮まれば利他となる」でした。もう菩薩の生き方は特別なものでも、聖者の特殊能力でもなく、仏教から独り立ちし、最も優れた処世術としてコモディティ化され始めます。僧侶と寺院はそのパイオニアとなれば、社会からとても大切にされるでしょう。

最後は、ヘルマンヘッセと宮澤賢治の言葉で締めくくりたいと思います。

渡し守は一言も発しないのに、語り手はよく感じた、静かに、胸を開いて、待ち受けながら、自分の言葉を受け容れてくれること、そして一語も聞きもらさず、一語も焦って促すことなく、賛辞も非難も挟まずに、ただじつところらの言葉に傾聴していることを。このような聞き手に、おのれを告白し、その胸の中へ自己の生涯、自己の探求、自

己の苦悩を沈め葬ることは何という幸福だろう。

自我の意識は個人から集団、社会、宇宙へと次第に進化する。

この方向は古い聖者の踏みまた教えた道ではないか。

新たな時代は世界が一つの意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは、銀河系を自らのうちに意識して、

これに応じていくことである。

なべての悩みを薪と燃やし、なべての心を心とせよ。

風とゆききし、雲からエネルギーをとれ。

個性の異なる幾億の天才も併び立つべく斯て地面も天となる。

我々に要るものは銀河を包む透明な意志、巨きな力と熱である。

有り難う御座いました。

大垣 宝光寺 釋潮叡

## 参考文献

「農民芸術概論綱要」「ゼロ弾きのゴーシユ」宮澤賢治・「シツタルダ」ヘルマンヘッセ・「宮澤賢治」齋藤文一・「雨ニモマケズ手帳新考」小倉豊文・「氣の思想」小野沢精一・「老壯と仏教」森三樹三郎・「儒教とは何か」加持伸行・「伝習録」王陽明・「易経」竹内好・「世阿弥」鎌田東二・「贈与と交換の教育人間学」矢野智司・「中村元選集」・「法華學報」伊藤瑞叡・「認識の仏教」丸山照雄・「国富論」アダムスミス・「ドラッカーライフアレンス」・「ダイアローグ」デヴィットボーム・「上原専禄著作集」・「世間への旅」阿部謹也・「公共哲学とは何か」山脇直司・「母性社会の日本の病理」河合隼雄・「平成二十五年度教師基礎研修会講義録」日蓮宗宗務院・「日蓮宗の近現代」日蓮宗現代宗教研究所

## 賢治探求の小径

賢治先生との急接近は、小学校国語教師鳥山敏子先生との出逢いから。憑依度があまりにも深くて三十七歳になった時生き方を見失ったほどの方。敏子先生の賢治探求は賢治先生の教え子の方々との果てしない雑談と思ひ出話しを通して、生々しく賢治先生と同居することと作品の演劇読みだった。ゆえに「賢治先生」と呼ぶのがなじみ深い。敏子先生の師匠は演出家であり大学教授であった竹内敏晴先生。演出家岡倉士朗（岡倉天心の甥）、作家木下順二、俳優山本安英、宇野重吉らと近代演劇界の端緒をになつた方。この竹内先生の俳優のレッスン、人間の生き方レッスンには賢治先生の作品が課題の一つとして常に挙げた。理解から入る経路ではない、手本に従つておのれの分別価値観を介せず、体感から立ち上がってくる「目覚め」へ行き付く探求。信解と言うべきか、この経路を模擬的色読と仮名し、梅干のように食わずしても唾を涌かせる教化道を探求。